

かたふた さらど
(8) 片府田・佐良土の戦い

～会津から水戸へ向かう諸生軍との戦闘～

① 諸生党の動き

水戸藩内では、光圀の時代から2派の対立があった。やがて、それが諸生党と天狗党の対立となっていく。

その対立が表面化したのは、藩主の後継問題であった。11代将軍家斉の子恒之丞を推す重臣派と、斉昭を推す藤田東湖・会沢正志斎・武田耕雲斎等の派が対立した。この対立は斉昭の後継によって着したかにみえたが、その後、将軍後継・条約勅許問題がからみ、佐幕開国＝重臣派・諸生党、尊王攘夷＝天狗党の形で対立が進んでいく。

水戸藩では、斉昭が藩主となると天狗党の勢力が増すが、攘夷実行・藩政改革を望む過激派は、桜田門外の変・東禅寺事件・坂下門外の変、さらには、筑波山にて挙兵を行なう。そのため、幕府によって天狗党の処罰が行なわれると、水戸藩の中心は諸生党に移っていった。

しかし、慶応3年(1867)王政復古があり、慶応4年(1868)に鳥羽・伏見の戦いが起こると諸生党の立場は苦しくなる。さらに朝廷から諸生党の中心人物市川三左衛門・鈴木石見守への厳罰の命が下ると、市川をはじめ佐藤図書・朝比奈弥太郎・笈助太夫等約500人が幕府復興を目的に会津に向け脱出した。

一時会津に入ったが、当時会津藩は新政府軍に対し恭順の意を表していたため、諸生党は越後に入る。越後に入った後、新政府の北陸道軍とたびたび交戦するが、長岡城が陥落すると旧幕府兵とともに再び会津に入り、会津軍に加担し新政府軍と戦っている。



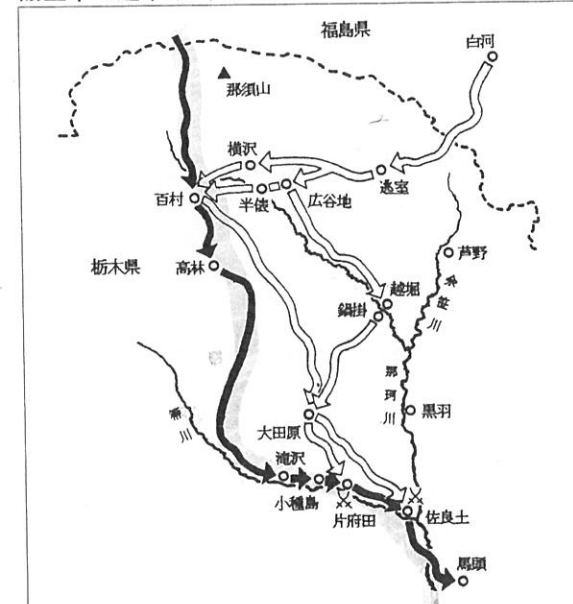
諸生軍の通過した会津中街道 [平2, 6 平塚静男撮影]

「片府田・佐良土の戦い」のあらまし

年月日	慶応4年(1868)9月27日(新暦11月11日)			
場所	那須郡湯津上村片府田・佐良土			
両軍の兵・数(数)	旧幕府軍	水戸諸生党 遊撃隊 回轉隊 貫義隊 長岡藩兵 (300(500)人)	新政府軍	大田原藩兵 彦根藩兵 阿波藩兵 黒羽藩兵 ()
戦いの展開	会津若松から水戸へ向かう諸生軍を黒羽藩が情報を得、大田原・彦根・阿波藩兵の応援を得て攻撃。諸生軍は強い抵抗をせず水戸に向かう。			
死傷者	新政府軍の死者8人 諸生軍の死者17人			
備考				

『水戸藩の戊辰戦争』・『黒羽町誌』・『大田原市史』により作成

諸生軍の進軍略図



『水戸藩の戊辰戦争』により作成 (□は黒羽藩兵)

9月16日、仁王村の戦いで、諸生党を追い越後から会津に来ていた水戸藩兵が新政府軍の中のことを認め、さらに9月22日の会津藩降伏を契機に、水戸城が手うすであることを判断し、水戸城奪還を決意する(『水戸藩の戊辰戦争』・『水戸市史』)。

② 片府田の戦い

月・日	黒羽・大田原藩等の動き	諸生軍の動き
9・15	○賊徒三斗小屋に放火の報が黒羽藩兵に入る	
9・16	○三斗小屋放火の報が参謀へ	○仁王村の戦いで水戸藩兵を確認
9・17	○大田原兵帰藩を命ぜられる	
9・18	○大田原兵帰藩	○大内宿へ
9・19	○黒羽兵帰藩を命ぜられる	
9・20	○黒羽兵若松出発、勢至堂へ	
9・21	○黒羽兵、白河へ	
9・22	○黒羽兵、辻室に宿営	
9・23	○黒羽兵、広谷地に本部をおき、横沢・半俵に軍を備える	
9・25	○諸生軍南下の情報を得る	○田島にて若松城陥落を知る 田島を出発、百村へ、さらに夜中出発 ○高林で食料等を奪い、上横林へ ○下石上で夕食をとる ○薄葉、滝沢、小種島を通過 ○片府田へ、朝食をとる
9・26	○黒羽兵、越堀と百村へ(越堀より大田原へ) ○大田原藩、彦根藩・阿波藩兵に応援依頼	○片府田・佐良土で交戦 ○篠川を渡河、小川、馬頭へ
9・27	○大田原・彦根・阿波3藩の兵、片府田へ ○黒羽兵、佐良土へ ○片府田で交戦 ○佐良土で交戦	

『戊辰役戦史』・『水戸藩の戊辰戦争』・『維新と大田原藩』により作成

黒羽兵は、諸生軍の大田原攻撃をおそれ、兵をまとめて大田原に向かっている。大田原藩も諸生軍の攻撃を予測し、光真寺に駐留していた彦根兵、鍋掛に駐留していた阿波兵に応援を依頼した。彦根兵・阿波兵ともに白河口に向かう途中であったといわれている。

9月26日の大田原藩の様子は、『維新と大田原藩』の中の「池沢兵助日記」によってよくわかれる。大田原藩は、大田原城攻撃を信じ、石林へ出陣し、山上に権現筒まで配置する。しかし、諸生軍が石上に入った情報を入手すると軍を引きかえさせ、石上への夜襲を決定している(『戊辰役戦史』・『維新と大田原藩』・『明治百年野州外史』)。

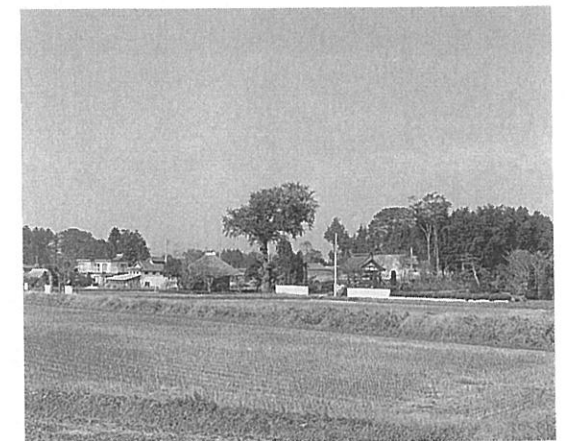
諸生党には、旧幕府軍新遊撃隊・回天隊・純義隊・貫義隊・長岡藩兵等が加わった。その数は、300人とも500人ともいわれ、市川三左衛門を首領とした。これらを総称して、諸生軍という。

諸生軍は9月25日、会津田島から水戸に向けて出発し、会津中街道を通り、大峠・三斗小屋を経て百村(黒磯市)にせまった。

これより先の9月17日、大田原藩兵は会津若松で帰藩命令を受け、18日に大田原にもどった。黒羽藩兵は9月19日に会津若松で帰藩命令を受け、21日に白河、22日には辻室(那須町)に宿営した。翌23日には、広谷地に本部と2小隊・砲2門、横沢に2小隊、半俵に2小隊を置き、三斗小屋を放火した敵に備えた。

25日夜、三斗小屋より百村に向け数百の諸生軍の移動の情報を得た黒羽兵は、26日に4小隊を百村へ、2小隊を越堀に移動させ、はさみ討ちをはかった。

しかし、諸生軍は黒羽兵の移動前に行動をおこし、早朝、百村を出発してしまう(『大田原市史』・『黒羽町誌』)。



交戦が行なわれた片府田 [平3, 11 齊藤静男撮影]

さらに諸生軍が石上で夕食をとり、薄葉・滝沢・小種島を通過したという情報が入り、夜襲計画を中止し、黒羽藩6小隊を佐良土へ、大田原・彦根・阿波兵は福原渡(片府田)から背後を襲い、はさみ討ちの計画に変更される。

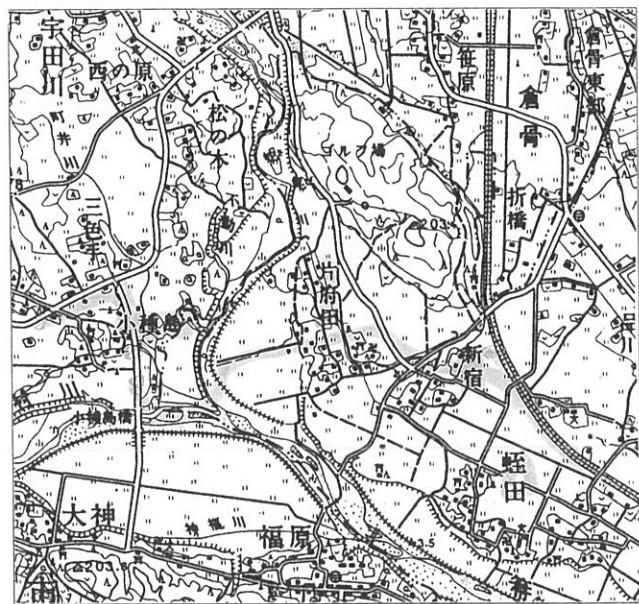
翌27日、3藩兵は、平林・刈切・大和久から丘陵上を片府田に近づき、池沢兵助の偵察によって諸生軍の宿泊を確認した。

諸生軍は、上の集落に100人、下の集落に170人、宝寿院に30人が宿泊していたといわれる。「池田兵助日記」には、その一部の様子が生々しく記されている。

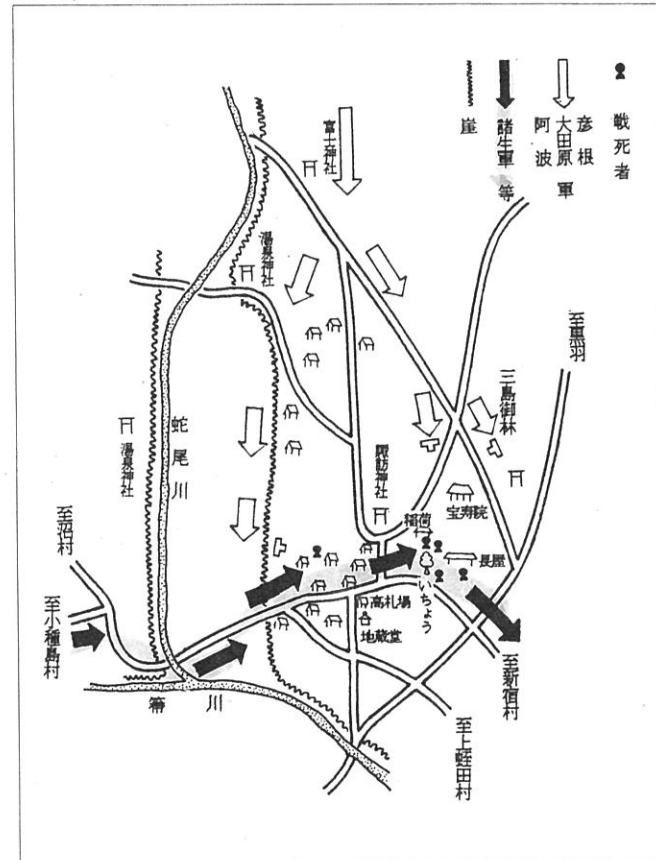
戦端は、新宿・蛭田への蛇尾川用水路空堀から諏訪神社方面へ3藩連合の銃撃で始まった。当初、不意をつかれた諸生軍であったが、陣形をたてなおし応戦、さらに白兵戦になった。ただ、阿波藩兵だけは、白兵戦に加わず、後方からの銃撃だけだったという。

しかし、諸生軍の抵抗は、3藩連合軍の想像を上まわるものだったらしい(『維新と大田原藩』・『大田原市史』)。

片府田周辺五万分一地形図



諸生軍・大田原兵等の動き



『大田原市史』前編により作成

『明治百年野州外史』によれば、諸生軍は、幾多の戦いをのり越えてきた強者であり、さらに降伏決定の会津軍より、新式の銃と多量の弾薬をもらいうけていたといわれる。「池田兵助日記」にも「甚だ苦戦すること一時ばかり身方惣軍林へ繰入る」という記述がある(『明治百年野州外史』・『維新と大田原藩』)。

白虎隊士の生き残り

会津若松城落城の直前、白虎隊の若き兵士が自刃したことは余りにも有名である。この内の1人である飯沼貞吉は、絶命する前に助けられ、後に仙台通信管理局工務部長となった。この直系の子孫が、現在西那須野町にお住いである。

片府田の戦いにおける死傷者

3藩連合軍	諸生軍
大田原藩	○ 戦死
○ 戦死 阿久津又次郎	・長屋門前に1人
○ 負傷 印南小左衛門	・稲荷神社前に2人
小林 房次郎	・大銀杏根元に1人
彦根藩	・西の集落に2人
○ 戦死 西川 本太郎	※ 氏名等については不明
山口 捨次郎	○ 負傷者不明
宮川 増弥	
西沢 与惣次	
○ 負傷 中島 与惣次	
阿波藩	
○ 戦死 負傷なし	

『大田原市史』・『北関東戊辰戦争』により作成

3藩連合軍と諸生軍の戦いは、約2時間ぐらいだったといわれる。諸生軍は徹底した抵抗をみせず、蛭田方面に撤退をしてみた。『水戸藩の戊辰戦争』によると、諸生軍の目的は水戸城の攻略にあり、無益な戦いをできるだけ避けるためだったらしい。

諸生軍撤退後、3藩連合軍は追撃をせず、一時休憩の後、追撃を始めている。諸生軍の武器の優秀さと、整然とした撤退の方法に追撃できなかったともいわれている。なお、「池田兵助日記」によれば、阿波藩兵は追撃に参加せず、片府田から引きあげたと記されており、戦いの様子などからもみて、協力的ではなかったらしい(『大田原市史』・『水戸藩の戊辰戦争』・『戊辰役戦史』)。

③ 佐良土での戦い

一方黒羽藩兵は、3藩連合軍との約束通り、中田原温泉神社の前より、倉骨・蛭田村を経て佐良土に着陣している。『黒羽藩記』によると、1小隊を光丸山山上に備え、2小隊と大砲を蛭田村と佐良土村の間に進め、3小隊を光丸山本堂の東川岸に配置し、諸生軍を待っている。

佐良土村は、那珂川と箒川の合流点にあり、川を越えれば水戸領であり、諸生軍の通過は容易に察知できたと思われる(『黒羽町誌』・『黒羽藩記』)。



諸生軍の戦死供養塔
〔平3.11 斉藤 静撮影〕

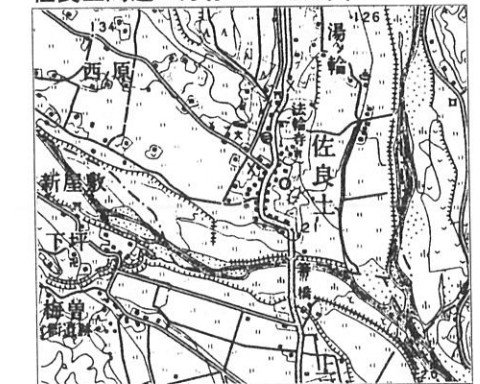
※後難を恐れて誰もが供養しなかった諸生軍を、片府田の女性がふびんに思い建立したもの

諸生軍の本部となった某家は大田原藩兵によって焼かれ、一時、矢倉に身を隠したという。

また、蛭田村蜂巣伊蔵は、米3斗1升のたきだしを命じられている。戦いの中での住民の無力さを感じる。

(『池田兵助日記』より)

佐良土周辺五万分の一地形図

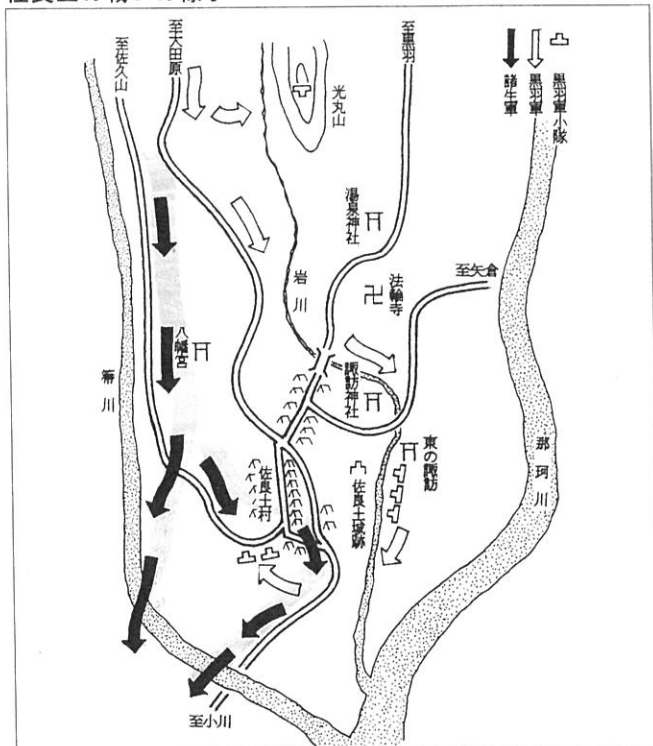


諸生軍と黒羽藩兵の戦いは、黒羽藩の大砲1発によって開始された。『明治百年野州外史』によると、黒羽藩兵の苦戦のようすがうかがわれる。諸生軍は優秀な兵器を持ち、兵力も黒羽藩兵の約2倍といわれる。ましてや、追撃してくるはずの3藩連合軍は片府田で休憩しており、黒羽藩が一手に諸生軍と戦わなければならないという状態であった。

諸生軍は、第一戦で佐良土宿に放火し、黒羽藩兵と戦い、その間に後軍が箒川を渡河している。さらに、渡河を終了した後軍が援護射撃を行ない、第一戦の戦闘員が渡河を完了するという実戦を数度経験した戦いぶりであった。

これに対し、黒羽藩兵は、佐良土宿に放火された上、援護射撃に追い追撃ができなかったといわれる。その時の様子を『黒羽藩記』は「賊又戦ニ熟シ防戦ス、我三面ヨリ合撃、終ニ吶喊を試ム」と記している（『明治百年野州外史』・『黒羽藩記』）。

佐良土の戦いの様子



『戊辰役戦史』『北関東戊辰戦争』により作成

3藩連合軍(阿波藩は引き上げていたとの考えもある)が諸生軍を追撃し、佐良土に到着したのは、諸生軍が渡河を完了した後であった。3藩連合軍と黒羽藩兵のはさみ討ち計画は失敗に終わったといえる。3藩連合軍の追撃がもっと急であったなら、また別の展開になったのではないだろうか。『水戸藩の戊辰戦争』は、諸生軍が単なる通過にすぎないということを知った黒羽藩は、徹底した攻撃をしなかったとも記している。

いずれにせよ、29日早朝、片府田で始まった戦いは、午後4時頃、約8時間に及ぶ戦いが終わっている。

『水戸藩の戊辰戦争』に、10月6日の松山戦争前に、高崎藩が大田原藩七之助、黒羽藩熊窪藏之丞という青年を諸生軍の中から捕えたということが記されている。斥候に出たところを捕虜となったと思われる。これら2人の青年から、大田原藩・黒羽藩の動きが諸生軍に相当流されていたのではないだろうか（『水戸藩の戊辰戦争』・『明治百年野州外史』）。



佐良土古戦場跡に残る諸生軍戦死塔
〔斉藤 静撮影〕

佐良土の戦いにおける死傷者

黒羽藩	諸生軍
○戦死 新江 新吾	○戦死 11人 ※氏名等は不明
小室 末蔵	
佐川久治郎	
○負傷 渡辺銀五郎	
○分捕 小銃 10挺	

『黒羽町誌』により作成